

令和 2年 2月 17日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980072

氏 名 大山祐亮

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 ヴィリニウス (国名 リトアニア)
2. 研究課題名 (和文) : バルト・スラヴ祖語は存在するのかスラヴ語派とバルト語派の系統関係の研究一
3. 派遣期間: 令和 元年 8月 27日 ~ 令和 2年 1月 31日 (158日間)
4. 受入機関名・部局名: ヴィリニウス大学・文学部
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ヴィリニウス大学文学部のバルト語学科において、Daiva Sinkevičiūtė 先生ならびに Miguel Karl Villanueva-Svensson 先生のもと、主にリトアニア語関連の見識を深め、資料収集に努めた。

バルト・スラヴ祖語は存在するのかという人文科学の分野では比較的大きなテーマを掲げて留学したが、リトアニアで主に研究したのは、日本で教えることのできないバルト・スラヴ語のアクセント論である。これは近年の中心テーマであるため、留学して知識を得るのが必須であった。

アクセント論の中でも、今回の中で特に集中して研究したのは、バルト語とスラヴ語における音調（上昇調と下降調）がどのような起源から、どのように発生したのかという問題である。バルト語とスラヴ語には、英語等のアクセントとは異なり、アクセントの置かれる位置（音節）だけでなくそのアクセントが上昇調なのか、下降調なのかという区別が存在している。これは一般的に印欧祖語には遡りえない体系とされており、バルト語派とスラヴ語派の内部での革新だとされている。

留学中に、Villanueva-Svensson 先生に参考文献等の教示を受けながら検討した結果、以下のような結論を得た。まず第一に、上昇調は印欧祖語の喉音*Hの脱落と、有声有気音と有声無気音の合流という二つの音変化に伴って獲得されたものである。第二に、下降調は上昇調が無い単語のみに音韻語単位で付与されるものである。そして最後に、このプロセスはバルト語派とスラヴ語派で同じものである。この結論は、バルト語とスラヴ語の音調の起源が普遍的な音調発生のプロセスを辿っていること、かつバルト語派とスラヴ語派に共通のバルト・スラヴ祖語を立てることはやはり必要であったということを示している。

このように、当初の予想とは異なるものの、示唆に富む研究結果を得ることができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の派遣によって研究成果は東ヨーロッパの欧文雑誌に英語で投稿する予定である。既に博士論文に向けた草稿という形で日本語でのまとめは完成しており、既にある程度発表に向けた準備は整っている。

今後の研究計画は、以下の通りである。

- ・ アクセントと他の音変化との関連の検討。例えば、音調が上昇調か下降調かというアクセント上の違いが印欧祖語*-ōの反映形の違いを生んでいるのではないかという説が Jay Jasanoff によって提出されたことがあるが、それは本当に妥当であるのかという問題などが未解決のまま存在している。
- ・ 未解決であるスラヴ語派の他の音変化の詳細の解明。例えば、印欧祖語*-os がスラヴ語派で*-bとなるのか、*-o となるのかという問題は、150 年以上論争が続いており、未だに意見の一致をみない。
- ・ バルト・スラヴ語派と、他の印欧語族の語派との系統関係の解明。ゲルマン語派がバルト・スラヴ語派に最も系統的に近いといわれているが、アルバニア語のような比較的印欧語族の中で孤立した言語との関係は、まだあまりよく検討されていない。
- ・ バルト語派とスラヴ語派で（少なくとも見かけ上）共通した音韻・形態上の革新が、バルト語派とスラヴ語派の共通祖語の段階で起こったものなのか、あるいはそれぞれの語派で並行して起こったものなのかという問題の検討。最も重要なのは所謂サタム化（印欧祖語*k と*k^w が*k に合流する変化）と RUKI の法則（*i, *u, *r, *k の直後で*s が*š になる変化）が共通祖語の段階で起こったものなのかという問題である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究内容の項で述べた通り、最も重要な知見はバルト・スラヴ語派のアクセント論についてである。何を参考にすべきか、近年の研究では何が重視されているのかを知ることができた。留学前はアクセント論について、ストレスが音節の間を反復横跳びしているというようなきわめて漠然とした印象しか持っていなかったが、留学中に理解を深めるのみならず、先行研究の仮説を改善するような研究結果も得ることができた。これは留学前の自身の予想を大きく上回る成果であった。それと並行して、研究資料の収集もしっかりと行うことができた。

具体的な研究内容以外の点についても、得られた点は複数ある。例えば、日本では、少なくとも自分の周囲においては、雑誌のインパクト・ファクターについてほとんど議論されていないが、海外では盛んに検討されていることがわかった。また、逆に、アウトリーチ活動のような分野に関連した議論はほぼ皆無であったのが興味深い。この点は日本の学术界の方が進んでいるという印象を受けた。

また、派遣前に既に得られていた成果を、国際学会で発表することもできた。これが自身にとって初めての国際学会の経験でもあり、研究成果のような数字の面以外でも、発表に臨む態度や質疑応答のこなし方などに関する知見を得ることができた。

学問以外の点についても教訓がある。留学中、集団の中において問題が発生した場合に、異質な存在が真っ先に疑われるということをししばしば体験した。最も重大なのは学生寮の自分の区画で窃盗が発生した際に自分が真っ先に疑われたことで、それ以降疑心暗鬼となり、隣人付き合いに大きな支障をきたした（勿論、私が犯人であるわけではない。結局犯人はわからず、私自身も一度共用の冷蔵庫に入れた食料品を盗まれた）。他人を信用しすぎないこと、そして当たり前ながら自分の身は自分で守るということの重要性を痛感した。短時間であっても部屋を離れる際には必ず鍵をかけ、共用スペースは極力利用しない方がよい。